

みらいのトビラ 

年寄りは、世界に飛び出す若者たちを愛でるべし

川口盛之助×デービッド・アトキンソン：日本の「真の国力」とは（その3）

構成：久我 智也 2016/08/01 00:00

日本のお国柄を定量分析した『**日本人も知らなかった日本の国力(ソフトパワー)**』（ディスカヴァー21）の著者である川口盛之助氏と、国宝や重要文化財の補修を手がける小西美術工藝社 代表取締役社長のデービッド・アトキンソン氏による対談の最終回。2020年東京オリンピックを前にして、さまざまなメディアで日本を見つめ直す企画が増えている。その中での日本は、規律正しく、誠実で、優れた技術を持った国として紹介されている。しかし、世界から見た日本は、本当にそのような国なのか。2人の結論は、「日本の未来を悲観する必要なし」。ただ、大きな前提がある。それは…。



川口氏（左）とアトキンソン氏（写真：加藤 康）

日本の未来は暗いのか？

—— 今、日本の未来を悲観する声が多くありますが、アトキンソンさんや川口さんはどう思っていますか？

アトキンソン 「日本の未来は暗い」とは全く思いません。私は1965年生まれですが、産業革命を最初に起こした英国は1970年代に入ってから経済が非常に低迷し、1979年までは真っ暗な時代でした。すごいと思っていた大英帝国は崩壊して、英国病と言われて世界からバカにされ、この国は終わりだと言われるようになっていたんです。国のすべてが否定されていました。

例えば、私がオックスフォード大学に通っていた時代には、「オックスフォード大学は既得権益の塊のような学校で将来はない。あんなに腐っている大学はない」と言われていました。「入試や卒業までのプロセスがおかしい」「そもそも学生を選んでいる人がおかしい」「教育のやり方がおかしい」と散々否定されたんですよ。

しかし、その後にサッチャー首相の改革の結果、英国経済が上向きになっていき、今どうなっているかといえば、オックスフォード大学は世界第2位の大学と評価されています。独特の教育制度は世界一だと。米国には勝てないかもしれないけれど、こんなに小さい国として

第2位はすごいじゃないかと言われるようになりました。でも、実は12世紀に大学ができてから、教育制度を大きく変えたことはほとんどない。経済が悪くなったときには徹底的に叩かれ、経済が良くなると徹底的に褒められる。ここがポイントだと思います。

川口 英国がいわゆる「英国病」から持ち直したのは、金融（ファイナンス）分野の貢献がすごく大きいと思うんですが、日本が同じことをやろうとしてもダメですよ。

アトキンソン 金融の話は、ちょっと評価し過ぎなところはあると思いますが（笑）。「では、経済を立て直すために英国は何が変わったのか」というと、そんなに大きく変わってはいないですよ。単に、自分たちなりの本当の目標や目的を見定めて、そのために何をすればいいのかということ突き詰めていくことで、経済を立て直したんです。

川口 日本は英国とは得意・不得意な分野が違う。じゃあ日本は何ができるのか、何を持っているのか。日本の得意分野にまずは気がつかなくてはならない。

アトキンソン そうです。日本は世界でもトップクラスの実力を持っているけれど、実績が伴っていない。そのギャップを埋めていくためには、きちんとした目的を設けて、それを徹底的に追求していく。日本にはポテンシャルがあるということは分かっているんですから、この2つができれば未来は暗いなんてことはないと思っています。

これは1つの例なんですが、私が社長を務める小西美術工芸社は神社を補修する仕事が多いんです。補修する際には、もちろんすべての部分が大事なのですが、中でも1番大切な場所は、神社の「正面」です。そのうち神様がいらっしゃる場所が最も大事で、2番目は宮司がお祭りのときに座る場所です。3番目は貴賓として来た人が座ったときの目線にあるところが大事。

でも、私が小西美術工芸社に入ったときに職人たちが一生懸命に仕上げていた場所は、例えば縁側の下の、さらに裏の方でした。もちろん、それ自体は悪いことではありません。問題は、1番大事な神様がいらっしゃる場所の仕上げが1番良かったわけではなかったことなんです。細部にこだわるのであれば、まずは1番大事な場所にこだわらしましょうと。こだわりの精神を否定しているわけではなく、こだわる順番をきちんと決めていない。作業を始める前

にきちんと優先順位を決めて、説明すれば、「ああ、そうか」と理解して、みんなが選択と集中を考えるようになる。そうした取り組みが、実力と実績のギャップを埋めることにつながると思います。

日本復活のカギは若者にあり

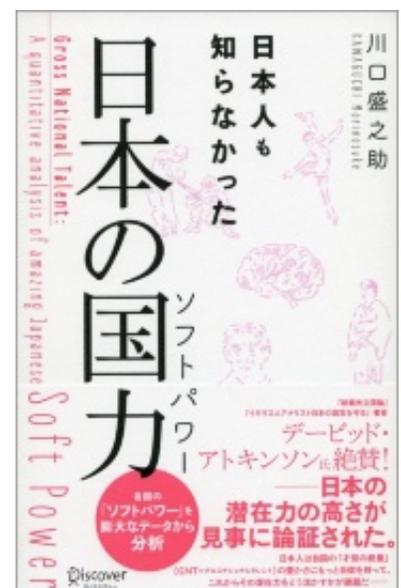
——日本のエレクトロニクス産業をはじめ、大手企業のものづくりの現場を見ると、今のアートキンソンさんの話と相似形のこと起きていないかと感じることがあります。では、日本が日本流で復活するには、どんなことが必要ですか？

川口 やはり、カギになるのは若者だと思います。

今、王道の分野だけではなく、新興の分野やニッチな分野でも、世界の最先端で頑張っている日本の若者がたくさんいるんですよ。例えばダンスの世界でいうと、先日、英国ロイヤルバレエ団で2人の日本人バレエダンサーがプリンシパルに昇格しましたよね。ダンスでは、王道の分野です。今回の**著書**を執筆するに当たって調べたんですが、一方で、その対極にある新興分野のストリートダンスでも日本の若者は非常に頑張っていて、日本はフランスに次いで世界2位の力を持っています。

日本の若い人たちは、ある特定の分野に強いわけではなく、好奇心の赴くままに様々な分野にチャレンジしている。別に国が命じたわけでもなく、彼らが勝手に世界に出掛けて行って、勝手に頑張っているんです。これはすごいことだなあと感じます。

前回の東京五輪の時に日本国民の平均年齢は26歳で、今は46歳です。約60年で20歳も平均年齢が上がったんですよ。前回大会では選手の世代が街を歩く平均的な人だったけれど、今は大会を運営する背広を着た人たちが平均なんです。それを考えると、社会が保守的な方向に進んでいる理由が分かる気がし



川口氏の著書『日本人も知らなかった日本の国力（ソフト

ます。でも、若い人たちはへこたれずに好奇心を保ち続けている。そこに「日本は滅びない」という感じがあるわけです。 (パワー)』 (ディスカヴァー21)

年寄りは、そうした好奇心を愛でて、応援しながら、ソフトパワーをお金に換えるためにサポートしていくべきです。その取り組みが、日本の復活につながると思っています。

アトキンソン 私も川口さんの考えに同感で、若者の力が必要だと思っています。川口さんの本で取り上げている世界で活躍する才人たちも、平均年齢を出すと20代とか30代とかじゃないですか。ノーベル賞だってほとんどの場合、実際は20~30代での業績がおじいちゃんになってから“優勝”と見なされるわけで。

やはり、私たちの年頃になると「怠け者」になるんですよ。それはなぜかというところ…。



デービッド・アトキンソン。小西美術工藝社 代表取締役社長。1965年英国生まれ。オックスフォード大学で日本学専攻。アンダーセン・コンサルティング、ソロモン・ブラザーズを経て、1992年にゴールドマン・サックス入社。日本の不良債権の実態を暴くレポートを発表し、注目を集める。1998年に同社マネージングディレクター、2006年同社パートナーを経て2007年退社。2009年に小西美術工藝社に入社し、2011年から同社会長兼社長に就任。(写真：加

藤 康)

川口 守りに入りますからね。

アトキンソン ええ。守りに入りますし、力が抜けていく。朝に起きるともう疲れている世代なので。江戸や明治の時代の日本に活気があふれていた理由は、簡単に言えば平均年齢が低く、若かったからですよ。

小西美術工藝社は、かつて実質的には経営破綻に近いような状態でした。でも、今では困るくらいに仕事が増え、経営は上向きになっている。設備投資を拡大して、新規事業を始めたりすることもできるようになった。その間、たった7年です。社員を入れ替えたわけではありません。何が違うのかと。

1つは、データを分析して不要なものを削ったこと。もう1つは、自分たちの世代、つまり50歳以上の人に仕事の主導権を握らせないようにしたこと。それで、業績が回復したんです。

アトキンソン 50歳以上の人たちのことを否定するわけではないですし、もちろん解雇したりするわけでもありません。「あなたたちは、先生になってください。親方を譲ってください」と話しました。やはり歳を取ると、どうしても仕事のペースは落ちてしまう。若い人たちは力を持っているのに、親方たちのペースに合わせて仕事をしなくてはならないので、それでは仕事がうまく回らなくなってしまうんです。ですから、下の世代に主導権を渡し、若い人にチャンスを与えることにしました。主導権を得ることで、若者たちはさらに仕事に燃えていくことになった。

川口 成功体験がある上の世代の人たちは、何も変えずにこのままの方がいいとなってしまいがちです。でも、若い人たちを応援することがおじさんたちの役目ですからね。世界最高峰の歴史あるバレエ団のプリンシパルになる若者もいれば、ストリートダンスの世界選手権で頑張る若者もいる。その幅の広さを「ヒップホップダンスは好きじゃないけど、新しいことをやっているならいいよね」と愛でることができるかどうか。



川口 盛之助（かわぐち・もりのすけ）。株式会社盛之助代表。1984年、慶應義塾大学工学部卒、イリノイ大学修士課程修了。日立製作所を経てアーサー・D・リトルに参画。各種業界の戦略立案プロジェクトに広く携わり、同社アソシエート・ディレクターを務めた後に、株式会社盛之助を設立。国内のみならずアジア各国の政府機関からの招聘を受け、研究開発戦略や商品開発戦略などのコンサルティングを行う。『メガトレンド』シリーズ（日経BP社）の著者。
morinoske.com（写真：加藤 康）

アトキンソン そうなんです。そういう意味でも、若い人たちにバトンを預けるべきだろうと。小西美術工藝社でもそうですが、おじさんたちの仕事は、若者を支え、何か問題が起こった時に後始末をすることなんですから。「生涯現役」という言葉がありますけれど、うちの会社では「障害現役」と書きます。障害にならないようなら現役でいいけれど、障害になるような現役にはなるなという意味です。

日本は確かに人口減少時代に入りましたが、減ったとしてもドイツや英国を上回っていますから、先進国では米国に次いで2番目の人口大国です。1億人国家は世界に12カ国しかなくて、その中にまだ入っている。だから、世界のあらゆるところで日本人が活躍するのが当たり前で、できていないなら何か問題があるということなんです。

そうだ、川口さん。今度は、「いかに、私たち、おじさんたちの力がないか」ということをデータで証明する本を書いてみてくださいよ。日本には隠居という素晴らしい文化があるんですから、早めに引退して隠居しましょうということを伝えるんです（笑）。

若者に広がる「諦観」の正体

——ただ、日本の今の若者にはお金もうけに興味がない人が多いという印象がありますが。

アトキンソン いや、そんなことはないと思います。若い人たちは、基本的にお金を持っていません。だからこそ、お金もうけをしたいという気持ちが強いんです。それが若い人の普通の姿です。

川口 ただ、日本の若者に「諦観」の気持ちがあることも否定できないですね。数で言ったら圧倒的に上の世代の方が多いわけですから、どうしても上の世代の言い分が社会的に通りやすくなってしまいます。そうなると、エネルギーの無駄遣いというか、諦観という時代の気分が出てきてしまうんです。

アトキンソン 確かにそれはありますね。51歳の私ですら、上の世代との対立には疲弊してしまうことがあります。明らかに変えるべきだというものがあるのに、上の世代には全然話が通じない。周りの若い人たちに意見を聞くと彼らも変えるべきだと思っているのに、上の世代はあの手この手で変えないんです。若者たちからすると「アトキンソンのような外国人が言っても変わらないならもういいよ」となってしまいます。これはものすごく残念なことですよ。

川口 それは一番危険なことですね。若い人のやる気や好奇心を封じるようなことをしてしまうと、本当に終わってしまう。おじさんたちは、若者が世界に羽ばたけるようなプラットフォームをつくってきました。そのこと自体は自信を持っていいし、誇っていいと思います。だけど同時に、これだけ長い不況が続いているのは、我々おじさんたちの責任が大きいですから、若者の挑戦を応援しないと。

アトキンソン 年寄りの年金を払うのは若者なのに、なぜその若者を愛でないのか不思議で

しょうがない。

川口 その通り。私たちは、若者に食わせてもらわないといけないんだから。

日本は成熟した国といえるのか？

—— 今回の対談の冒頭で、川口さんは「日本は本当に成熟した国なんだろうか」というところから、『日本人も知らなかった日本の国力(ソフトパワー)』を執筆したと話していました。では最後に、「成熟した国のあり方とはどんなものなのか」を聞かせてもらえますか？

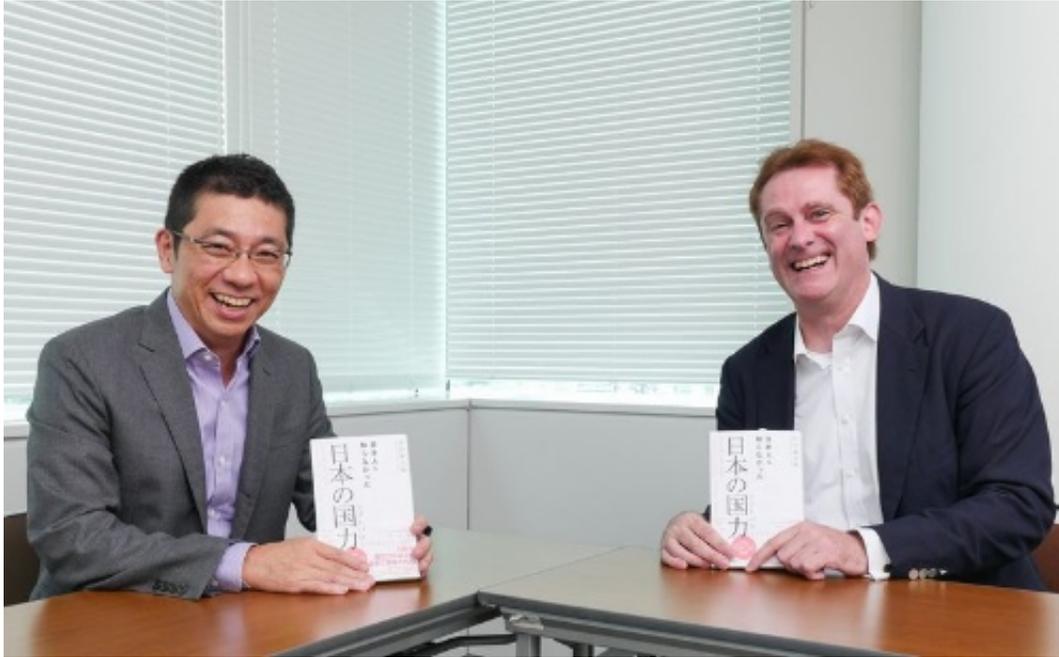
川口 繰り返しになってしまいますけど、上の世代は戦後の焼け野原から頑張って日本を復興させ、若者たちが世界に羽ばたけるだけのプラットフォームをつくってきました。そして実際に、若者たちは世界に飛び出している。上の世代が下の世代の礎になるということは、成熟した国の良いあり方だと思います。

ただし、せっかく礎を築くことに成功したのに、今、それが目的化している風潮がある。それではプラットフォームが無駄になってしまう。せっかくここまで頑張ってきたのだから、次はしっかりと回収できるような仕組みをつくらないと。それは、アトキンソンさんのような優秀な経営者たちがやってくれることだと思っていますけども。

アトキンソン 対談の始めにも言いましたけど、これまでの日本は無理にお金もうけをしなくてもよかった。しかし、止まってしまった経済は再び成長させなくてははいけません。そのためには、国の中身を変えていかなくてはならないんです。

国の中身を変える1つの方策として、上の世代は若い時に大きなチャンスをいただいて、今の時代では考えられない早いうちに出世もできて、財産もできました。恩返しとして、早いうちに若者にバトンタッチしないといけません。我々のような年寄りはそろそろ隠居して、若い人に失敗と成功をするチャンスを与えて、盆栽いじりをすべきなのかなと思います。

(この項、終わり)



(写真：加藤 康)

この記事のURL：<http://techon.nikkeibp.co.jp/atcl/column/15/317534/071100021/>

Copyright © 2016 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

このページに掲載されている記事・写真・図表などの無断転載を禁じます。著作権は日経BP社、またはその情報提供者に帰属します。